批評・紹介

中國農村社會の構造

福武直著

昭和二十一年十月二十日　京都　大雅堂刊
A5版　五〇七頁　定價六〇圓

一

本書は題名によつて明かな樣に、歷史研究の專門書ではない。にもかかはらず敢へてここに紹介してみたいと考へるのは、次の樣な理由によるのである。

第一に常識的な理由であるが歷史は常に現在に關係つけられてゐる。それは歷史の對象が常に運動としてあり現在を生みだしたものとしてあるばかりでなく、歷史考察の主體である歷史家そのものもまた現在的立場において歷史を把握するところにある。歷史學における問題は常に現在に關係つけられて提起せられてあり、またそうあらねばならない。本書の樣な中國社會の現在的分析は、かうした意味で決して歷史家の無關心たり得ないものであると思ふのである。もつとも本書をここにとりあげたのは決してかういつた常識的な理由がその全部ではない。

即ち第二に、中國史においては日本史や西洋史に比較した意味で、現在の社會に對して極めて重大な關心を拂はなければならない特殊な理由があると思ふのである。それは、中國社會が一般に停滯的社會であると言はれてゐることに關聯する。勿論歐米近代國家と接觸し始めた十九世紀半ば以後、一般に半植民地的と言はれる樣に中國社會は相當に顯著な變化を受容して來てゐるけれども、現在でもなほ近代は過去を克服し終つてゐないことでもわかる樣に、中國社會とくに中國農村社會の基底には昔ながらの近代以前的諸關係が根强く殘存してゐると言はれてゐる。從つて近代的な經濟、文化によつて變化を被つた側面を一應捨象することによつて、現在の農村社會から歷史時代のそれを類推することは、あくまで類推の域を越え得ないにしたところで、歷史家にとつてすこぶる重要な意味をもつものと言はねばならぬ。まして中國史においては、ほう大な史書の存在にもかかはらず、社會經濟に關する具體的資料が極めて乏しい現狀においては、この類推はいよいよもつて歷史家の重要な手段となるのである。

更に第三に今一つの特殊な理由がある。それは著者の理論的立場についてであつて、著者が現實分析に用ひられた社會學的方法なるものが、とくに社會學に歷史的時間觀をもち込む立場に立つものであるといふことに關聯する。されば次に著者福武氏の方法論について一應ふれておかねばならない。

二

著者は序文において、本書にもし何等かの存在意義があるとすれば、それは本書に用ひられた社會學的方法によるものであると斷つてゐられる。勿論本書のもつすぐれた價値については、ひとへに著者の功績に歸すべきこと當然であるけれ

ども、著者がその方法を意識的に強調される以上は、たとひ社會學に全くの素人であり、その方法よりも本書の實證的內容により興味をもつ私達歷史家であつても、著者のとる方法を看過するわけにはいかないと思ふのである。

本書の第一部緒論には、かういつた著者の意圖と方法とについての說明がなされてゐる。それによれば、社會學の對象である社會的共同生活は政治、經濟、宗教などから遊離したものではなく、それら全てを含むところの全社會生活でなければならない。「社會生活とは人間が政治的經濟的宗教的に他の人間と交涉して生活することであり、純社會的なるものが經濟的なるもの政治的なるもの宗教的なるもの等から遊離して存在するのではないのである。」人間の社會生活の中から政治、經濟、宗教などから分離した對象、即ち社會的形式を抽出することによつて、社會學を政治學、經濟學など他の精神科學から嚴密に區別せしめ、社會學をこれら諸科學と並列する個別科學として位置づけたのは、ジンメルにはじまる形式社會學であつた。著者はフライヤーの現實科學的社會學理論の立場に立つことによつて、形式社會學の誤謬を指摘し、幷せて自らの立場を明かにせられたのである。

フライヤーによれば、社會學はその初期にあつては、決して現實から遊離したものではなかつた。むしろ逆に、それは現實そのものを問題とすることによつて、科學として獨立した。社會學が成立したのは十九世紀の初頭であるが、當時の歐洲は產業革命の進展、高度資本主義の確立の時代であり、各國における相ひつぐ革命の勃發によつてアンシヤン・レヂーム的國家に對する市民的社會の背反が人々の間に大きな問題として浮び上つた。今まで人間の全生活を包含するものと考へられてゐた國家に對して、社會はまた別箇の運動法則をもつものとして理解せねばならなくなつた。社會學はかうした現實の中で國家學から分離し獨立したのである。從つて當時の社會學は現實を時間における運動として問題とした「社會學は歷史哲學の子孫であり、その相續者でもあつた」のである。フランスの實證主義的社會學、イギリスの普遍史的社會論、そしてドイツのマルクス社會學、その「いづれにしても共通なことは、時間が、生成が問題に組み入れられてゐたことである。」

さてしかし精神諸科學が對象とする現實は本來的に二樣の構造をもつてゐる。第一次的には實在的生そのものである。それは本質において生成であり生起である。しかるに第二次的に、これを理念的內實として見る場合には、現實は客觀的精神となり、生はその單なる運載者となる。現實は生成ではなく存在によつて價値づけられ、永遠化される。歷史性は捨象され、時間は非時間化される。精神科學は歷史學と心理學とを除いたほかすべてかかる客觀的精神を對象とするのであつて、フライヤーはこれをロゴス科學と名付けた。社會學が初期のそれから進んで諸科學の列位に加はり、その對象において獨自の領域を限界づけるべく要求するには、自らかかる客觀的精神を對象に選ばねばならなかつた。かうして客觀的

精神の形式を對象とすることによつて、社會學を他の諸科學と並列する個別科學たらしめたのはジンメルであつた。ここに社會學のロゴス科學化が行はれた。從つてロゴス科學的形式社會學は、その論理構造及び體系における嚴密性の要望は滿し得たけれども、當然そこに歴史性の缺除といふ缺陷を受け取らねばならなかつたのである。

フライヤーは形式社會學の功績を一應認めつつ、しかも社會學は再ひ社會的現實を對象とすべきであり、現實科學であらねばならない、それはロゴス科學たるべきでなくエトス科學たらねばならないと規定する。フライヤー社會學における問題性が何處にあるかは目ら明かであらう。現實科學としての社會學においては「あらゆる範疇において」歴史性が意識されねばならない。社會學的思惟はその概念の中へ社會的現實の歴史的內實を、その概念の體系的聯關の中へ社會の歴史的運動を採り入れ」たければならないのである。そればかりではない。社會學はそれ自體が一つの歴史的現象であり、ある一定の歴史的段階において出現したものであり、從つて社會學のもつ問題意識そのものまでが一定の歴史的情況に關係つけられてゐるといふ意味においても歴史化されてゐる。社會學は二重の意味において歴史性をもつ。

本書の著者福武氏がフライヤー社會學を嚴密にそのまま受容されてゐるか否かについては私は知らないのであるが、大づかみに言つて右の樣なフライヤーの理論的立場にあることは推定して誤りないと思ふ。とすれば私達歴史家として、本書をとくに注目しなければならぬ理由はもはや明白ではなからうか。本書は中國農村社會の現在的な分析なのであるけれども、その現在は歴史的過程として意味づけられてゐるのであつて、歴史家としては、この著者の志向を反轉せしめることによつて、中國の歴史社會研究に少なからぬ暗示をくみとることが出來るのである。

三

本書は二部に分れる。第一部「華中農村社會の構造」、第二部「華北農村社會の研究」である。第一部を「構造」、第二部を「研究」と名付けてあるのは次の樣な意味がある。即ち兩者はもともと統一的な構想の下に一書にまとめるべく執筆されたものでない。といふばかりではなく、兩者の研究の基礎となつた資料も同じではないのである。第一部華中の方は、筆者自ら幾度かの實態調査を經驗されて自身蒐集されたデータにもとづくのである。從つてデータそのものが著者の意圖する社會學的研究に最も適切な形で集められたものであり、第一部はそのため社會構造の展望的分析が最もよく整理され敍述されてゐる。ところが第二部華北の研究に用ひられた中心資料は「北支慣行調査資料」である。これは勿論それ自體は既に定評ある資料であるが、その調査の基調が法的部面にあつて社會學的な部面にはないのであるから、これによる著者の研究が幾分の制約を受けたであらうこと想像に難くない。とにかく第二部は社會構造の展望的な全般的分析ではな

く、その中から家族と村落との二つを取りあげ、具體的内容の敍述に主力をそそいだものである。

さて本書の内容を項目を追つて紹介することはここでは避けたい。本書の内容は各編の最後の章に整理されてゐる。また第二部緒論に著者が述べてゐられる樣に、本書はこれまでの通説に對する反措定的試論の意味をもつてゐる。そこで各篇の要約によつて本書の反措定的主張をまとめてみようと思ふ。

今まで一般に、中國農村は自給自足的封鎖自然經濟の段階にいまだに止つてゐると考へられて來た。もつとも農村の自給自足的自然經濟といふことは、近代以前の封建的社會の典型としては、あながち中國のみの特殊現象ではないけれども、近代資本主義が海外よりおしよせて來てをり、しかも上海をはじめとする都市においては相當に資本主義經濟が發達してゐる現代において、かかる都市との對比のもとに農村の自然經濟が强調されたのである。ところが農村の實態調査の結果によれば、この考へは捨てなければならなくなつた。農村はもはや自給自足的自然經濟の段階にはなく、むしろかなり徹底した交換經濟のもとにあるのである。もつとも華中と華北とではやや段階を異にし、華北では交換は集市（定期市）によつて營まれ、華中では更に一歩進んで鎭の固定的店舗を中心とするが、いづれにしろ食料を除く殆ど全ての日用必需品が既に購入せられ、零細な投農では食料でさへ購入されるといふこと、從つて農民の所得及び支出には貨幣部分がかたりの比率を占めるといふことには華中も華北も變りはないのである。

このことは、經濟のみならず、農村の社會的開放性を問題にしても同樣である。中國農村社會は決して今まで信せられてゐた樣な封鎖的小宇宙的共同體ではない。勿論そこに共同體として考へらるべき集團性がかなり殘つてゐることは事實であり、そしてその集團性において華北がより强く華中がより弱いといふ程度の差も認められるが、しかし一般的に言つてその共同體的集團性は極めて弱いものであつて、殊に華中では農村はもはや殆ど完全に開かれてゐるとさへ言へるほどである。華中では、集團性は農村（嚴密には村落）よりも鎭と農村との結合關係の方により强い。著者はそこで華中での基本的共同體として町村（鄕鎭）共同體の概念を提出されてゐる。そして私達にとつて重要なのは、かうした農村の開放的性格が、決して外國資本主義によつて近代にたつて持ち込まれたものではないといふことである。もつとも著者はこの狀態を解體過程と考へてゐられる樣ではあるが、しかしそれは資本主義による、外部よりの强力による、變化ではない。それは農村の内部構造と本質的に關係をもつ。從つて中國農村社會の停滯性とも關聯する。

農村社會が今まで考へられてゐた樣な封鎖的共同體ではなく、極度に開放せられてゐるといふことは、逆に言へば統一性、協同性が殆ど存在しないことを意味する。農村社會にはこれを統制すべき身分層が現れない。勿論村長はじめ村の代

長者たる數人のボスの存在は認められるけれども、これらの指導者達と一般村民との間には共同的家父長的隷屬關係もなければ、保護と奉仕とにより結ばれる封建的な身分的統屬關係も全くないのである。形式的には村民は平等なのである。これは如何なる理由によるものであらうか。華中では土地の大半が在鎮不在地主に集中せられてゐるために農村内部における階級分化が少く、土地所有を通しての地主と小作との關係は鎮と農村との間接的なものとなり、これが土地所有關係に封建的性格の結ひつかない一原因であらうと著者は言はれるが、しかし華北の、在村且營地主の多い農村においても、地主と小作、雇農との關係は決して封建的身分的なものではなく合理的契約性を帶びてゐるのであるから、これには別の原因が考へられねばならない。そしてそれは農民の經濟的な浮沈、階級の交替が極めて激しいといふ現象と密接に關聯し、ひいては農民の家族制度に原因すると考へられる。

更にまた農村は協同性に乏しい。農村共同體はそれが古代的なものにしろ中世的なものにしろ著しい協同性を特色とするのであるが、中國の農村社會にはそれが殆ど見出せないのである。たとへば農村には共有地が殆ど全くない。また農耕に伴ふ協同は農民にとつて最も重要なものであるにもかかわらず、華北の着青を除いては、これまた殆ど見出し得ない。勿論農村内部において、換工とか農具役畜の共有、貸借など幾分の協同がないわけではないが、それは決して農村全部を含む永續的な組織ではなく、利害を超越した全體性をも持たないで、合理的な契約性を帶びた農民個人間の關係に止まるのである。この樣な農村の消極的合理的性格もまた結局は農民の家族制度に歸し得られる樣に考へられる。

中國の家族は今まで次の樣に考へられて來た。即ちそれは近代社會には見られない大家族であつて、家長は絶對的專制的な權力をもつ家父長として家族に君臨し、家族員は家父長に對して服從の義務のみをもつ奴隷的存在である。それはいはば古代的な大家族として概念せられてゐた。しかるに事實は全く逆であることが明かとなつたのである。まづ中國農村家族は大家族ではなく平均五人前後の小家族である。勿論その家族構成は近代單婚家族に比較すれば傍系親を含む複雜なものであるけれども、決して考へられてゐた樣ないはゆる大家族ではない。のみならずその家長權はこれまた決して言はるる如き強力なものではない。家長が直系尊屬の場合はその權力は全るほど相當に強いが、これは家長そのものの權力ではなく、父權が家長權と重疊することによつて生じたものである。從つて家長權が父權と分離するところの傍系尊屬家長の場合には、その權力は豫想外に消極的であり溫情的であつて強制的なものはでない。これは家長の相續が嫡長主義によらず齊行主義によるところに原因する。そして齊行主義とは同輩兄弟が家長相續について均等の機會をもつ平等意識に支持されたのであつて、この平等意識はまた財産相續における均分思想に最もよく現れてゐる。財産は家産として觀念されることなく、同輩者は財産相續に均等の權利をもち、從つて

徹底的に均分される。均分は親の遺言にさへ優越するのである。かうして家族の徹底した合理的平等主義的均分思想のために、財産は常に家族員によつて將來均分せらるるものとしての分け前＝持分から觀念せられることとなり、そしてこの持分意識は家族をして、遠心的分裂性格を帶びさせる樣になる。家族は組合的なものとなる。この樣にして家族は一見强力な結合をなす樣に見えるけれども、これは内にはらむ分裂的性格を補强せんとする人爲的外被にすぎず、實は持分意識に支へられた全體性であつて、これが表面的には合理的性格として現象するのである。この徹底した合理的性格、具體的には輩行主義と均分思想こそが、家族をして本家中心の封建的結合關係を結ばしめることなく、更に階級の昇降運動を激烈ならしめることによつて農村の身分的權威を生ぜしめることもなく、ひいては中國社會において封建的關係の芽生えることを阻止することによつて中國の停滯性をも規定するところの最も基本的な條件なのである。

四

本書に對する批評はすでに各界の權威によつてなされてをり、いまさら附加すべき何ものもないが、問題の點を明かにする意味において二、三の斷片的な批評をのべてみたい。

第一に著者の主張される反措定とその對象となる措定說とはある意味をもつて關係づけられてゐる。といふのは著者によればそれは時間的運動としてみられてをり、換言すれば反措定的現在の狀態は措定的過去の崩壞過程として意味づけられてゐる。もつとも著者はこの點を詳しくのべられたわけではないからよくわからないが、それにしてもこれは大きな問題である。勿論崩壞過程としてみること自體は基本的には正しい。としてもその崩壞過程の開始期をどの時代に求めるかによつて、そのもつ意味はすこぶる違つたものとなるのではなからうか。たとへば仁井田博士が批判さるる樣に、この時期を秦漢時代に求めるとすれば、我々は崩壞よりもむしろ停滯を問題にしなければならない樣に思はれる。著者はこれについて具體的に規定してゐられないが、しかしこれは著者の責任ではなく、實は歷史家の課題であらう。

次に著者は第一部において華中農村の共同體結合として町村(鄉鎭)共同體の概念を提出された。今のべた樣に著者はこれを村落共同體が解體したもの、一段階進んだものと考へられるのであるが、それはとにかくとして少くとも現在に關する著者の考へは全く妥當すると思ふ。即ち華中農村においては社會生活のすべての面にわたつて、とくにその基礎をなす經濟部面において、鎭を視野の外においては完全なる理解は出來ず、これは必ず鄉鎭一體として分析せねばならないと思ふ。しかるに著者は、自ら町村共同體を結論づけながら、しかもその視野を農村に限定された。このため華中農村の理解は焦點がぼやけてしまつた感なしとしない。本書の構成上における一つの、しかし最も大きな矛盾ではなからうか。

最後に封建制の問題がある。著者は封建制の中國農村にお

ける存在に對して否定的意見である。その論據は農村社會において身分的上下隸屬關係の存在せぬことにある。それでは今まで中國における封建制または半封建制の存在が主張されたのはいかなる立場においてであつたかといふと、いままでもなくマルキシズムのそれであつた。マルキシズムの立場にある人々が封建制を主張する論據の最大のものは剩餘生產物の分配關係、すなはち地代の率にあつた。この場合、封建制は經濟的側面から把へられてゐるのであるが、身分的隸屬關係を言ふ場合、それは法的な側面から把へられてゐる。そして注意しなければならないことは、兩者の封建制の意味する範圍が等しくないことである。西洋及び日本においては兩者は必ず並存したけれども並存は必ずしも一致ではない。マルキシズムの立場における封建制は、三つの發展段階、即ち古代奴隸制、中世封建制、近代資本主義制といふ生產樣式における、或ひは「社會の經濟的構成」における一範疇である。身分的隸屬關係を意味する封建制はかかる社會の經濟的構成の內で建てられた一つの法的制度である。前者は後者を含むが同一ではない。從つて著者が身分的隸屬關係が存在したことによつて封建制の存在を否定されても、それは今まで封建制の存在を主張して來た人々の意味する封建制を否定したことにはならない。兩者はもともと視角を異にするからである。

本書が出版されてから既に一年半を經てゐる。その間既に本書の價値は正しく認められてをり、その批評も一應は出つくしてゐる。今さら批評紹介でもないかもしれぬが、また考へてみると批評は何も新刊にだけ限る必要はあるまい。既に定評のきまつた著書論文を取り上げることは、それはまたそれで意義のあることだと思ふ。もつともこの退屈な紹介がどれだけ本書の値價を傳へ得たか、或ひは著者の値意を誤り傳へたところがあるかもしれない。著者福武氏の御寬容を願ふ次第である。

〔北村敬直〕

印度史概觀　足利惇氏著

昭和二十二年十一月二十日　東京、弘文堂刊
教養文庫版　一九〇頁　定價　三〇圓

本書は教養文庫の一書として、難解なる印度史各部門の學問的成果を極めて平易に且要を摘して略述し、具體的資料により之を裏づけ、讀者をして興味に惹かれつつ通讀せしむる如く記述せられあり、しかも、全卷を貫くに統一せる史觀を以てし、一見別世界にして、無關係たる如く見ゆる、古代印度と現代印度の間に、密接不可離の關係を認め、現代印度の抱ける苦惱の原因を、歷史的に形成せられし根强き分裂的種姓的印度社會及び之を地盤とせる印度文化がその民族としての統一を妨げしことに求められたり。即ち三篇より成る本書の第一篇「印度史概觀」に於て、印度の政治史を太古より現代に至る迄通觀しその特殊性を指摘し、第二篇「現代印度」に於て、現代印度の內包せる苦惱を分析してその二元性を回教徒侵入に直接起因せるものなるを歷史的に記述し、第三篇